

岩滝山遺跡第6次発掘調査報告書



2000年3月

財団法人 東大阪市文化財協会

例言

本書は、平成6年に財団法人東大阪市文化財協会が実施した岩滝山遺跡第6次発掘調査報告書である。

現地調査は、藤城泰(故人)が担当し、中西が本報告を執筆した。

本文目次

I はじめに	1
II 遺構と遺物	3
III まとめ	10

絵図目次

図1 岩滝山遺跡周辺の遺跡分布図	2
図2 調査地点位置図	2
図3 7号墳石室上面図	5
図4 7号墳出土遺物	7
図5 墓穴住居1出土遺物	9
図6 墓穴住居2出土遺物	9
図7 墓穴住居3出土遺物	10

写真目次

写真1 岩滝山遺跡遠景(南から)	1
写真2 全景(北から)	2
写真3 墓土壠断面(北から)	3
写真4 7号墳掘り方被出状況(東から)	3
写真5 7号墳全景(南から)	4
写真6 7号墳全景(北から)	4
写真7 7号墳東側壁全景	4
写真8 7号墳石室床面 奥壁部分(南から)	6
写真9 7号墳石室床面(北から)	6
写真10 7号墳側室部分 狹窓器出土状況(北から)	6
写真11 8号墳全景(北から)	8
写真12 8号墳全景(東から)	8
写真13 墓穴住居1全景(東から)	9
写真14 墓穴住居2全景(西から)	9
写真15 墓穴住居3(東から)	10

岩滝山遺跡第6次発掘調査報告書

1 はじめに

岩滝山遺跡は、昭和45年の道路建設工事中に発見されて以来、今日までに8度の発掘調査がおこなわれている。これまでの発掘調査によって岩滝山遺跡は、東大阪市六万寺町1丁目付近の標高60～100mに所在し、弥生時代後期の堅穴住居や平安時代から室町時代の掘立柱建物・池などの遺構を確認している。

平成6年度、岩滝山第8次発掘調査地点の北側にあたる東大阪市六万寺町1丁目1605番地で宅地造成工事が計画された。造成工事の予定地は、本遺跡の推定範囲内にあたり、遺構・遺物が残存していることが予想されたため、東大阪市教育委員会文化財課では、造成工事に先だって予定地内で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、現地表下50cmで土師器を含む地層と現地表下80cmの地山上面で、土壟状の遺構を確認した。試掘調査の結果、文化財課では造成工事に先だって予定地内の発掘調査を実施する必要性があるとの結論を出し、東洋住宅との間で協議を重ねた。そして、宅地造成工事予定地全体の628.5m²を対象に発掘調査することとなった。発掘調査は、東洋住宅からの委託を受けた財團法人東大阪市文化財協会が平成6年8月1日から10月15日まで現地での調査を実施した。

生駒山西側斜面には、東から西に向かって流れる小河川によって形成された幾筋もの谷筋がある。岩滝山遺跡は、鳴川谷の南側の尾根上の標高60～100mに立地している。第6次調査地点は、昭和58年国土地理院発行の「土地条件図 大阪東南部」では土石流段丘に分類されている。



写真1 岩滝山遺跡
（南から）

調査地点は、東から西に向かって傾斜するとともに北から南へも傾斜する本来の地形を改変し、平坦地となっている。

調査区内の掘削には、調査区全域を覆う約50cmの表土・盛土を重機によって掘削し、以下の層位を人力で精査することにした。

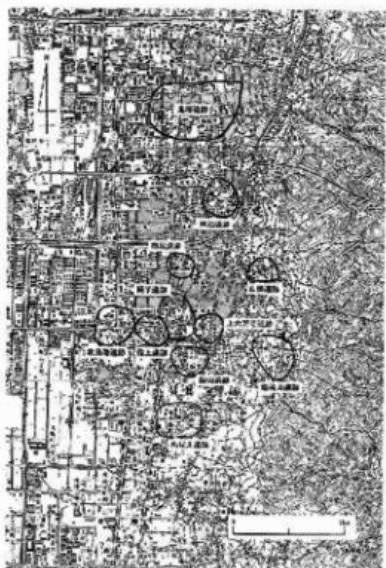


図1 岩波山遺跡周辺の道路分布図



図2 調査地点位置図



写真2 全景(北から)

II 遺構と遺物

調査区の中央から南寄り部分の地山上面からは、焼土壙2基・焼土溜り1基・古墳2基・竪穴住居3棟・土塹・Pitなどの遺構を確認している。これらの遺構は、埋土内に含まれる遺物から中世・古墳時代後期・弥生時代後期の3時期に大別できる。以下では、時期ごとに検出した遺構・遺物について記述してゆく。

中世の遺構

焼土壙2基は、いずれも1辺約1mを測る隅丸方形を呈する。壁面は火を受け、赤変している。焼土壙内からの出土遺物はない。本遺跡の第4次調査地点でも同じ状況を呈する中世の遺構が検出されている。焼土溜りは、東西約1m・南北約8mの長楕円形を呈する。埋土からは、中世の土師器皿・焼土・炭化物が出土している。



写真3 焼土壙断面(北から)

古墳時代後期の遺構と遺物

調査地区内からは、2基の横穴式石室を埋葬施設とする古墳を確認している。これらの古墳は、調査区周辺に分布する群集墳に属するものとして六万寺7号墳・8号墳と呼ばれている。以下では、この名称で2基の記述をすすめる。

六万寺7号墳

7号墳は調査区中央、後述する竪穴住居3と同一地点に位置している。7号墳は、平埴地の造成の際に墳丘と石室の上部が削半されている。このため、7号墳の墳形・墳丘規模は不明である。

7号墳の埋葬施設は、南側に向かって開口する無袖の横穴式石室である。

横穴式石室の掘り方は、前述した古墳の選地から埋没過程にある竪穴住居3の凹みを利用して掘削したものと推定できる。



写真4 7号墳掘り方検出状況(東から)



写真5 7号塁全景(南から)



写真6 7号塁全景(北から)



写真7
7号塁側面全景

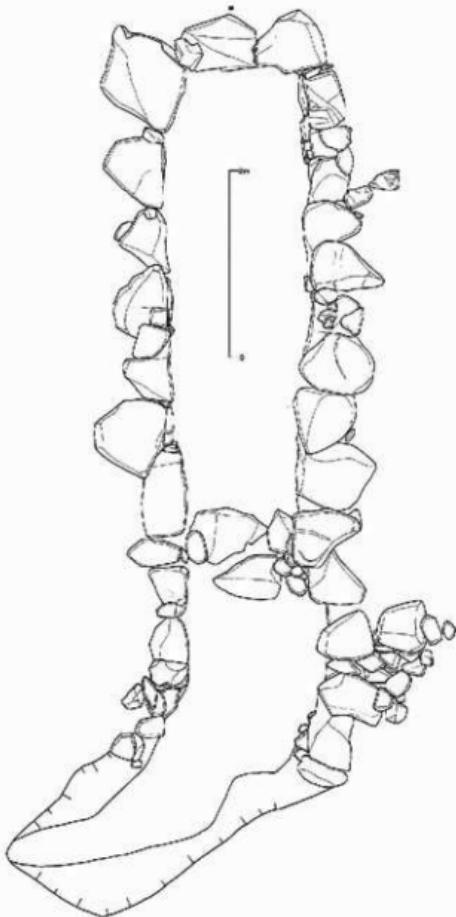


図3 7号墳石室上面図

その東西に拳大から人頭大の石を積み上げている。閉塞石の下部からは、土器類がまとまって出土している。

石室の南端部分には、西側に向かって地山を溝状に掘削した墓道がとりついている。

石室内からは、古墳時代後期の副葬品である須恵器・土師器・鉄鏃・刀子などとともに前述した棺金具の鉄釘を検出しているほか、平安時代の土師器椀・皿や鎌倉時代の土師器皿、瓦

横穴式石室の規模は、南北長7.4m・東西幅1.5mを測る。

石室の石組みは、奥壁・東西両側壁とも1~2段分が残存している。奥壁の基底石は1石で、東西両側壁の2段目の石組みの高さと合わせていている。基底石は、ほぼ垂直に据えつけられている。東西両側壁は、馬頭大から幅80cm前後の自然石または割り石を横置きしている。西側壁は、ほぼ垂直に積み上げている。これに対して、東側壁は内側に持ち送っている。両側壁の石組みの目地は、横方向に通る。

床面の北端部分には、南北約2.5m・東西約70cmの範間に拳大の石を敷きつめている。また奥壁から南へ約60cmの位置には、敷石の上部に東西方向に拳大の石を2段に積み上げた石列がある。この石列は、位置や検出状況から敷石上での埋葬後の追葬時に伴う棺台の一部と推定できる。敷石や棺台付近からは、鉄釘が散布している。

のことから、初葬および追葬時に用いられた棺は、木棺と推定できる。

奥壁から南へ約5mの位置には、閉塞石が残存している。閉塞石は、石室の中央に馬頭大の石を設置し、



写真8 7号墳石室床面 奥壁部分(南から)



写真9 7号墳石室床面(北から)



写真10 7号墳閉塞部分 須恵器出土状況(北から)

器椀・皿も出土している。

副葬された須恵器には、杯・蓋・無蓋高杯・細頸壺などの器種が認められる。杯には、短いたちあがりのつくもの(A)と、たちあがりのないもの(B)がある。蓋は、口縁部と体部をわける縞をもたず丸く仕上げ、杯Aと組み合わせとなるものと内面にかえりを貼り付け、天井部中央に宝珠形のつまみをもち、杯Bと組み合わせになるものがある。無蓋高杯の脚部は、中央に1帯の凹線を巡し、その上下に1列の方形透しを施している。細頸壺は、2帯の凹線を体部上半に巡らしている。土師器には口縁端部に内傾する面をもち、体部内面に1段の放射状の暗文を施す杯がある。

鉄釘は、頭部をL字形に曲げたもので断面方形を呈する。

平安時代の土師器椀は、平底の底部に断面三角形を呈する高台を貼り付けている。鎌倉時代の瓦器椀は、口縁端部を丸くおさめ、体部内面にヘラミガキ調整を加えて仕上げている。

このような遺物の特徴から図4の1・2・5は、6世紀末頃の初券時に伴う副葬品と推定できる。また、3・4・6は、7世紀前半の追葬時に伴うものと考えられる。

以上のような石室の形態的特

徵や出土遺物から7号墳は、6世紀末頃に築造され、7世紀前半に追葬が行われたものと推定できる。また、石室内から平安時代の土器類が出土していることは、最終埋葬後、平安時代に石室内への侵入を示すものと推定できる。さらに、鎌倉時代の縦片化した土器片が出土していることからこの時期に、古墳が破壊されたものと推定できる。

六万寺8号墳

8号墳は、調査区中央東寄りに位置している。8号墳は、7号墳と同様に平坦地の造成時に墳丘と横穴式石室の上部を削平されている。このため、8号墳の墳形・墳丘規模は不明である。

8号墳の埋葬施設は、南側に向かって開口する無袖の横穴式石室である。石室の規模は、南北長約4m・東西幅約1mを測る。石室の掘り方は、方形に掘削されている。石室の石組みは奥壁・東西両側壁とも基底石のみが残存する。

奥壁を構成する馬頭大の2石の基底石は、東西両側壁の北端の石によってはさみこまれている。東西両側壁の基底石は、馬頭大の自然石ないし割り石を横置きしている。石室内より鉄釘が出土していることから、埋葬棺に木棺を用いたと推定できる。石室内からは、鉄釘のほか7世紀代の土師器移動式竈片が出土している。

土師器の移動式竈は、大型のもので口縁端部に外傾する面をもつ。体部外面は、縱方向のハケメ調整を施す。口縁端部外面には、同心円状の当て具痕を残す。口縁部の特徴から、この移動式竈は、本地域で製作された曲げ庇系竈と推定できる。このような出土遺物から8号墳は、7世紀代に築造されたものと考えられる。

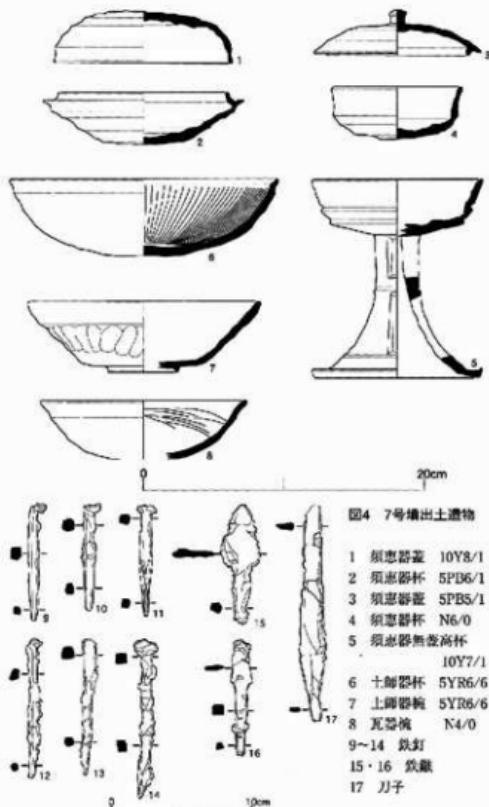


図4 7号墳出土遺物

1. 瓢窓器蓋 10Y8/1
2. 瓢窓器杯 5P16/1
3. 瓢窓器蓋 5PB5/1
4. 瓢窓器杯 N6/0
5. 瓢窓器無蓋高杯 10Y7/1
6. 土師器杯 5YR6/6
7. 土師器碗 5YR6/6
8. 瓦器碗 N4/0
- 9~14. 鉄釘
- 15~16. 鉄釘
17. 刀子



写真11 8号墳全景(北から)



写真12
8号墳全景(東から)

弥生時代後期の遺構と遺物

弥生時代後期の遺構には、堅穴住居3棟がある。

堅穴住居1

堅穴住居1は、調査区南西端部分で検出している。住居の検出位置と抜がりから堅穴住居1は、第8次発掘調査で確認している2号堅穴住居の北側部分と推定できる。平面の抜がりから堅穴住居1は、直径約8mに復原できる円形住居である。床面の周囲には、2重に巡る周溝がある。また、床面からは、複数の主柱穴を確認している。

堅穴住居1からは、弥生土器壺・高杯を検出している。壺には、外折する口縁端部の内外面に円形の竹管文を施すものと、下方に肥厚する口縁端面に7帯の凹線文を巡らせ、さらにその上に円形浮文を貼り付けるものがある。高杯の口縁部は、2重にひらく形態を呈する。

堅穴住居1の時期は、出土遺物や住居の平面形態から弥生時代後期前半頃と推定できる。

堅穴住居2

調査区中央西寄り部分にある堅穴住居2の平面形は方形を呈する。床面には、壁に沿って1重の周溝が巡るほか、東西方向に3基の柱穴がならんでいる。住居内からは、弥生時代後期の



写真13 壁穴住居1全景(東から)

図5 壁穴住居1出土遺物

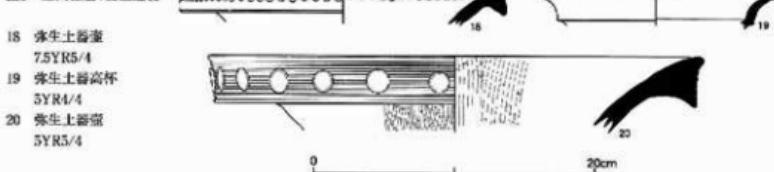


図6 壁穴住居2出土遺物

- 21 弥生土器高杯 7SYR6/4
22 弥生土器底盤 7SYR8/6



写真14 壁穴住居2全景(西から)

高杯・底部片などが出土している。高杯は、脚部片で外面をヘラミガキ調整で仕上げる。

壁穴住居3

壁穴住居3は、前述した六万寺7号墳の下部に位置している。本住居は、平面形が隅丸方形を呈し、深さ1.2mを測る。床面には、壁沿いに2重の周溝が巡るほか、主柱穴を確認している。また、コーナーの隅丸部分の壁面からは、住居中央部に向かって斜めに掘削した柱穴を検出し



写真15 墓穴住居3(東から)

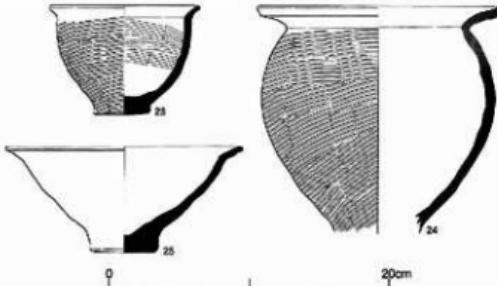


図7 墓穴住居3出土遺物

- 23 弥生土器甕 5YRS/1
- 24 弥生土器甕 7.5YRS/4
- 25 弥生土器鉢 5YRS/6

ている。墓穴住居内からは、弥生時代後期後半の甕・壺・鉢・高杯などが出土している。鉢は、平底の底部に外折する口縁部がつく。壺は、平底の底部から倒卵形の体部につづく。口縁部は外反し、端部を上方につまみ上げる。体部外面には、右上がりの平行タタキメがみられる。高杯は、口縁部が2段にひらく。

IIIまとめ

第6次調査では、本調査の南側で実施した第8次調査の成果と同様に中世から弥生時代の遺構・遺物を確認できた。調査地における古墳の破壊を含む平坦地の造成は、7号墳の石室内から鎌倉時代の瓦器片が出土していることから、この時期に進行したものと推定できる。このような平坦地の造成は、調査地点の南側に占地している往生院の展開と関連するものと推定できる。

本調査では、2基の古墳時代後期の古墳を新たに確認した。本調査での古墳の検出状況から

調査地点周辺には、さらに多数の削平された古墳が残存しているものと推測できる。

調査地周辺に分布する古墳は、六万寺古墳群としてとりあつかわれており、本調査で確認した2基を7・8号墳としている。

東大阪市南部には、五里山古墳群・桜井古墳群・浄土寺谷古墳群などが分布している。このうち、鳴川谷の南に分布する古墳は、五里山古墳群(鳴川谷古墳群)とすることが從前から論じられている。近年、六万寺古墳群が新たに設定されたが、その設定根拠を明確に示されていない。以下では、鳴川谷以南にある群集墳と鳴川谷以北の群集墳を比較し、その特徴をまとめてみたい。

鳴川谷以南に分布する五里山古墳群や本調査地点周辺に分布する古墳、さらに桜井古墳群の成立時期は、これまでの発掘調査の成果から6世紀後半にさかのぼる古墳がみられず、6世紀末頃と推定できる。一方、鳴川谷以北に占地する出雲井古墳群・山畠古墳群・花草山古墳群成立は、6世紀中頃までさかのぼるものと從前の調査結果から推定できる。したがって、鳴川谷以南に分布する群集墳は、鳴川谷以北の群集墳よりも遅れて成立したことになる。

鳴川谷以南では、6世紀末頃に古墳の築造を開始した後、桜井1号墳や六万寺8号墳のように7世紀代になってから新たに築造をはじめる古墳がある。そして、7世紀中頃まで追葬を完了している。

鳴川谷以南に分布する古墳の横穴式石室の形態は、無袖のものが最も多く、片袖が最も少ない。これに対して鳴川谷以北では、片袖のものが最も多く、次に無袖さらに両袖と続く。

本地域に分布する古墳に用いられている埋葬棺には、木棺・凝灰岩製の組み合わせ石棺が認められる。一方、7世紀前半に成立する墓尾古墳群では、四柱式陶棺を用いるものがある。

このように、鳴川谷以南にある3つの群集墳は、共通点が多く、それぞれの独自性を見出せず、1つのまとまりとして捉えることができる。また、鳴川谷以北の古墳群とは、群の消長・石室形態・埋葬棺などの特徴が異なっている。

6世紀中頃から7世紀初頭のミニチュア竈セットの副葬例は、八尾市高安古墳群や柏原市平尾山古墳群・河南町一須賀古墳群などで認められるものの、東大阪市域にある群集墳からの出土例はない。

しかし7世紀前半の大型の曲げ庇系竈の出土例が六万寺7号墳と山畠古墳群で確認されている。この2例は、竈のみが出土しており、ミニチュア竈にみられるようなセットを構成していない。

2例の曲げ庇系竈は、口縁端部外面に同心円状の當て具痕を残すものである。このような特徴から、曲げ庇系竈の製作には、須恵器工人の関与が推定されている。しかし、曲げ庇系竈は韓式系土器の系譜上にあることから韓式系土器の製作手法との関連で理解すべきであろう。

弥生時代では、後期前半の円形竪穴住居1棟、後期後半の隅丸方形住居1棟、方形住居1棟を確認できた。第6・8次調査から岩滝山遺跡の弥生時代の集落の動向を推定してみると、岩滝山遺跡では、後期前半に円形住居によって構成される集落が成立する。後期後半には、住居の平

面形が隅丸方形ないし方形に変化するとともに住居群が北へ移動している。そして、この時期で集落は廃絶し、古墳時代まで継続しない。

参考文献

荻田昭次「河内四條史」1977

東大阪市教育委員会「東大阪市の古墳」1996

中西克宏 藤城泰「岩滝山遺跡第8次発掘調査報告」「発掘調査概要」—1995年度(1)—財団法人東大阪市文化財協会 1997

中西克宏「岩滝山遺跡第4次発掘調査報告」財团法人東大阪市文化財協会 1999

芋本隆裕「山畑遺跡第15次発掘調査概要」1999

本書を執筆するにあたり田中万紀子の補助を得た。記して感謝いたします。

報告書抄録

書名	岩滝山遺跡第6次発掘調査報告書
ふりがな	いわたきやまいせきだい6じはぐつちょうさほうこくしょ
副書名	
巻次	
シリーズ名	
編著者名	藤城泰(故人)中西克宏
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
郵便番号	577-0843
所在地	東大阪市荒川3丁目28-21
電話番号	06-6736-0346
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行年月日	2000年3月
遺跡名	岩滝山遺跡
遺跡名ふりがな	いわたきやまいせき
遺跡所在地	東大阪市上六万寺町1605
所在地ふりがな	ひがしおおさかしかみろくまんじょう
市町村コード	27227
遺跡番号	
北緯	
東経	
調査期間	1994.8.1-1994.10.15
調査面積	628.5m ²
調査原因	宅地造成工事
主な時代	中世 古墳時代後期 弥生時代後期
種別	古墳 集落
主な遺物	須恵器 土師器 弥生土器 鉄釘 刀子 鉄鎌
特記事項	横穴式石室を主体とする古墳2基 竪穴住居3棟

岩滝山遺跡第6次発掘調査報告書

2000年3月

発行 財団法人東大阪市文化財協会
〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21
電話 06-6736-0346
印刷 株式会社ミラテック